

留学先からの報告 ~Brexit で揺れるロンドンから~

2016.6.25
武田 航平

LONDON SCHOOL OF ECONOMICS AND POLITICAL SCIENCE

イギリスの大学は6月中旬で Summer Term が終わり、新学期の始まる9月下旬までの長い夏休みに入りました。ただし授業は3月いっぱいまで終了し、イースター休暇を挟み Summer Term は試験期間なので、実質の授業期間は10月から3月となっています。ここでは、博士課程一年目の学習、およびLSE、ロンドンでの生活について報告させていただきたいと思います。

1、一年目に学ぶこと

博士課程一年目は基本的に、講義を受け、課題をこなしてクラス(演習)に出席するということの繰り返しです。科目選択の余地はなく、コア科目として指定されているマイクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学の3つで、それぞれ週3時間の講義と1.5時間の演習で構成されています。

コア科目の内容の中には、すでに一度学習したようなものもありますが、それらも含めて新たな視点を与えてくれるような講義が多く、充実したものだと感じました。例えば、日本であまり学習する機会がなかった、労働市場のサーチ・マッチング理論(2010年にノーベル経済学賞を獲ったピサリデス教授が在籍しているためLSEではこの分野の研究が比較的盛ん)や財政政策の話などは非常に為になりました。特に労働市場のサーチ・マッチング理論はこれからの自分の研究にも直結させていけるような気がしています。また今年も、客員教授として所属されていた清滝信宏プリンストン大教授が景気循環理論および金融政策もパートを担当されました。所々、日本人しか分からないであろう例え話を混ぜてきて、講義は非常に興味深いものでしたが、課題は頭を使う難しい問題が多かったです。特徴としては、マクロ経済学や計量経済学で実際にプログラミングを書くなどの機会はほとんどなく、かなり理論的側面を重視したような内容でした。

さて、これらのコア科目の評価は、すべて5月に行われる試験一発で決まります。LSEは絶対評価で、試験の成績が悪くても追試という制度はなく(また一年授業を取り直さなければいけない)、また課題なども一切評価の対象ではありません。なので、割りきって授業には出ずに試験勉強をして、合格点を取るという戦略をとることも可能です(実際、クラスメイトにもいました)。試験に出る内容は結構多いので4月・5月はこれらの試験勉強に追われていましたが、どれも合格ということでとりあえずは安心しています。

以上、一年目は基本的にインプットしかない期間でしたが、来年は徐々にアウトプットに移行していくこととなります。二年目にはフィールドコースと呼ばれる専門科目を2つとり(これらはコア科目同様、試験一発評価)、かつ論文を一つ書き上げることが求められます。ということで、夏休みの間は、この論文のネタを考えています。いくつかいいアイデアは出てきているので、夏休みの間に、それらをうまく纏めることを目標にしています。

2、LSEという大学

LSEはロンドンという街同様、「多様性」に溢れています。キャンパス内を歩いても、フランス語、スペイン語、イタリア語、中国語、アラビア語(らしき言語)など本当に様々な言語が聞こえてきます。今住んでいるところも、フラットメイトはそれぞれ出身

がフランス、スペイン、インド、オーストリア、韓国といった具合で様々です。ヨーロッパの金融の中心地(ハブ)、文化の中心地であるロンドンという場所柄、特にヨーロッパの国々のトップ層の学生が集まっているようです。とりわけ経済学の修士の学生で投資銀行や中央銀行などに就職する人たちと話してみると、卒業後 10 年もすればオックスブリッジの卒業生たちよりも平均年収が上回るというニュースも納得できるような気がします。また多様性というのは、国籍に限らずキャリアパスも様々です。博士課程のクラスメイトの中でも僕などは一番年下のようなもので、一度社会に出て、仕事を経験したのちに再び博士課程に進学するという人が多くいます。このような多様性は、社会科学が「実学」であるという側面を持っていることを考えると、非常に良い学習環境を生んでいるように感じます。

もう少し、研究の面に焦点を当てるならば、LSEの中でも経済学部の研究レベルは非常に高く、分野によってはヨーロッパの研究拠点となっています。そのため、2015/16 シーズンも著名な研究者がセミナーやカンファレンスで発表しているのを聞く機会に恵まれました。直近だと、6 月頭には開発経済学の Growth Week と呼ばれるイベントがありました。このイベントの目的は研究者と実務者(アフリカなどの発展途上国の政策担当者たち)を繋ぐことで、研究者は発展途上国がリアルに抱えるような問題をより理解しよう、という企画です。3日間、盛りだくさんの内容で研究者側も大物が発表しており興味深かったのですが、それ以上に実際に政策を立案、実行している人と直接話がができる機会というのは貴重で、ここからも自分の研究につながるような新たなアイデアが一つ生まれてきました。また僕の専門分野である空間経済学(国際経済学、都市経済学)については、SERC(空間経済研究センター)という場所があり、学部横断的に盛んな研究がおこなわれています。こちらについてもほぼ毎週セミナーがあり、お昼ご飯が浮くこともあって積極的に参加してみました。これらのカンファレンスやセミナーに共通しているのは、いずれも経済学の知見を実際の政策に反映させていくという強い意図が感じられたということです。これは LSE が多くの政治的リーダーを生み出していることに繋がっているのかもしれませんが、僕自身コア科目の勉強に追われている中でこのようなイベントに出ると、経済学を勉強している意味を再認識させられました。

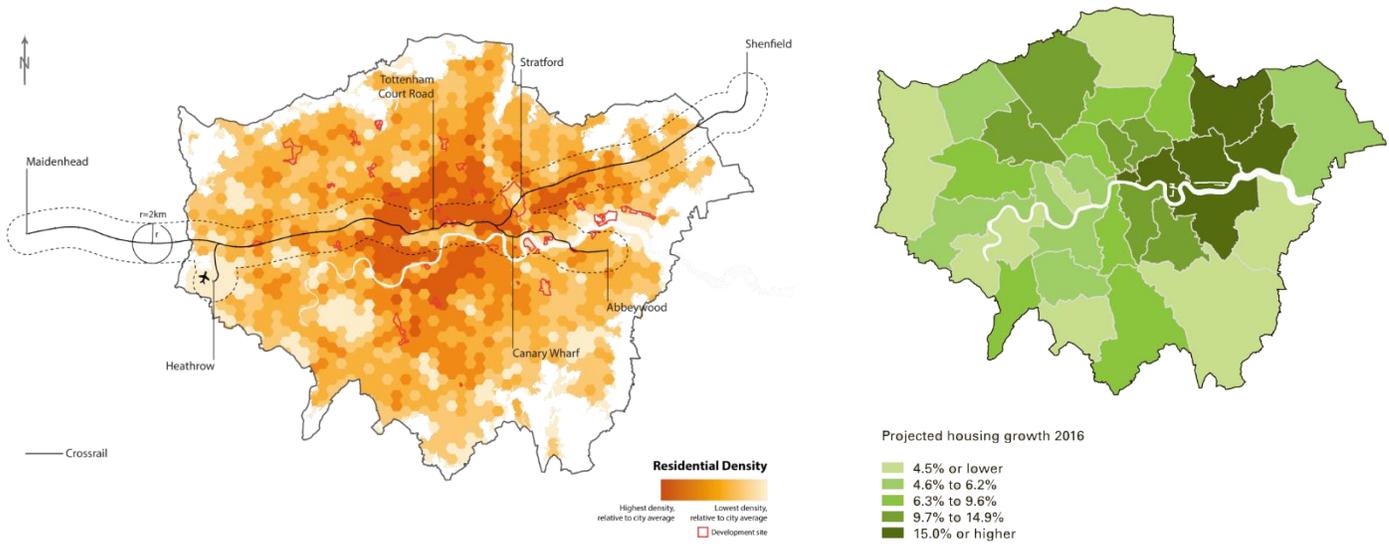
3、ロンドンという都市、そして Brexit

世界都市ロンドンに対して(最近の)多くの人がもつイメージと言えば、世界的な観光地、シティに代表される金融センター、文化・流行の発信地、雨や霧の多い都市、大気汚染がひどい都市、移民をはじめ様々な国出身の人が共生する都市... などなどでしょうか。実際これらのイメージは殆どその通りですので、それら以外のこと、特に僕が研究対象としている、都市と国際経済に関連したことについて少し触れたいと思います。

まず触れておかなければならないのは、住宅価格の高騰です。そもそもイギリス全体で見ても、過去40年間住宅価格の上昇は他の OECD 諸国(先進国)よりも大きいものでした。その中でも、ロンドンは1970年代から大きな価格上昇を表しています。第一の要因は、住宅供給が人口増加に対応できていないということです。移民も多く増え、また金融セクターとしての成長、サービス業の集積に伴う所得増加が進んできましたが、住宅供給は追いついていない状況です。左の2つの図¹は、ロンドンの居住密度と住宅供給の増加予想を表しています。ロンドンの東側は、近年開発が進み新しい住居などが増えつつありますが、依然としてそれ以外の住居密度が高い地域は住宅供給があまり伸びていません。では、再開発された場所に移られるかと言われると、そこにも別の問題があります。税金の一つに、SDLT(stump duty land tax)と呼ばれるものがあり、不動産や土地の取引に課税されます。この税金の存在によって、housing mobility は低くなり、結果として、住宅市場における需要と供給のミスマッチが生じてしまっています。その他にも、bedroom tax や様々な課税などが、housing crisis に拍車をかけています。これらの問題点を解決する政策を考えることは、都市経済学の一つの課題となっています。

以上が一般的なお話しなのですが、個人的にはこの夏の間に、新居を探さないといけないので、現実的な問題です。目下、色々な物件を探していますが、あるものはとても古い物件だったり、あるものはとても高い家賃だったり、なかなか条件のいい物件を見つけて契約までこぎつけるのは大変です。研究の題材とする前に、まずは自分の住む場所を確保しなくてはなりません...

¹ LSE Cities Project の Urban Age Data より。詳しくは <https://urbanage.lsecities.net/>



さて、もう一つのお話は、まさにこのレポートを書いているときに世界を賑わせている Brexit のことです。23 日に行われた国民投票の結果は皆さんご存知の通り、Brexit が過半数でした。クラスメイトの中でも、特にヨーロッパ出身の人たちは非常に落胆しています。実際、ロンドンは残留派が多かったわけですが(「ロンドン独立」なんて運動もあるらしく...)、それでもパブなどでこの話をしているとシティで働いている人の中にも離脱に賛同している人と議論になることが何度もあり、個人的にはもしかしたら離脱派が想像しているよりも多いのではと感じていました。一方で、LSE や Oxford などでの議論になると、研究者の中ではやはり残留派が圧倒的に多数を占めていました。皆、議論好きで、選挙前のパブなどでは EURO2016 と Brexit の話で溢れかえっていましたし、どちらに賭けるかなどを話し合っていました。やはりそこは賭け好きのイギリス人というところでしょうか。

Brexit となり、予想通りのポンド安、ユーロ安、株価下落などが今まさに起こっていますが、今後どうなっていくかは本当に不透明です。少なくとも言えることは、中央銀行は協調して市場の不確実性に対処していかなくてはならない(インフレ圧力のある中での金融政策)ということと、政府は政治の混乱が経済に与える短期的な影響を最小限に留めることが必要だということです。国際経済のモデルはいくつかのショックに対してある程度の数量的予想を出すことは可能ですが、政治の混乱という大きなリスクを考慮することは難しく、決して完全に予見することはできません。ましてこの流れが他の EU 諸国に波及していき、世界経済にどのように影響していくか、ともなると未知数です。それでもなお、データと理論に基づいて将来のリスクについて評価をしていくために、研究をしていかなくてはなりませんし、この Brexit という歴史的な選挙を目の当たりにすることができたのは、その意味において幸運なことだと思っています。



Brexit から一夜明け、取引開始前の
ロンドン証券取引所前の広場と
St.Paul 大聖堂

4. 終わりに

一般論と個人的所感が入り混じったレポートになってしまいましたが、ロンドンのど真ん中という本当に充実した環境で学生生活を送れています。ロンドンもようやく夏らしくなり始め、一番過ごしやすい時期になってきました。夏は Proms 音楽祭を始めさまざまなイベントも多く、楽しい時期でもあります。世界中から一流の演奏者・オーケストラが集中する音楽祭は、クラシック好きの僕にとっては最高のイベントの一つです。気分転換としてそれらも楽しみつつ、今は、カフェの外や公園で論文を読んだりしながら自分のアイデアをうまく具現化させていくという作業をしています。一年目は、勉強のことばかりでしたが、来年は研究の内容について報告できるよう、恵まれた環境を生かして一層インプット・アウトプットに励んでいきます。

最後に改めて、私の学生生活を支援してくださっている公益財団法人船井情報科学振興財団の皆様に、厚くお礼申し上げますとともに、これからも益々精進していきたいと思えます。



毎年夏、2か月くらい続くProms 音楽祭の様子(ロイヤル・アルバート・ホール)



Oxfordにて、6月